

園長だより

NO100



2024.5.1

新年度が始まり、あっという間に1か月が過ぎました。在園児は進級し新たな環境での生活が徐々に安定に向かっていきます。子どもなりの進み方なので実にゆっくり、ゆっくりのペースです。新入園児も慣らし保育を経て園生活の体験を通じてわかりはじめてきました。

さて、この便りも地道に書き続け100号という節目を迎えます。100回記念は数年前の第100回全国高校野球選手権大会や最近では箱根駅伝100回大会などがありました。がしかし、この便りでは伝えたいこと、知らせたいことを保護者（読み手）の都合も考えず一方的に配り続けていますのでアニバーサリーにするようなものではありません。とりあえず節目を通過し園長職でいるうちは続けていこうと思っています。

愛着の形成（アタッチメント）

今年、入園した1歳児のこと、仮に太郎君とします。慣らしも順調、母子分離の日を迎えると、母から離れた不安から泣いてしまいます。その太郎君を抱っこして園庭を散歩、気持ちを切り替えようと保育者は優しく包み込むように対応していました。ただ母は強し、愛情をたっぷり注がれている太郎君は母親と離れたことがこの上ない不安を抱くことに「お母さんがいいよ」「なんでおいていくの」と心が脈々と鼓動を打っています。

でも現実にはお母さんはここにはいない、保育者も太郎君の心情に寄り添いそばにいる。肌と肌とをつき合わせ、心のあたたかさを伝達するが涙がおさまったり、また思いだしてはしくしくする姿がしばらくの間続いています。

愛着形成（アタッチメント）とは子どもが怖くて不安な時や感情が崩れたときに特定の大人が傍に寄り添い、「もう大丈夫」と安心感に浸ることとも言われています。入園前は主に母親が子どもにとっての安心基地になっています。保育園では母親のかわりはできないけれど子どもを守る大人としての存在になります。

数日後、しくしくと泣いている太郎君は保育者に抱かれて保育室から出てきました。私は太郎君に「こっちにくる?」「抱っこしようか」と言葉をかけ手を差し出しました。太郎君は泣くのをやめ、顔を保育者の胸元にうずめ、私に抱かれることを嫌がりました。私はこの数日で太郎君にとって保育者は安全な避難所であり、安心できる基地になってきていることを感じました。

崩れた感情に寄り添い、崩れた感情を関わりを通じて立て直すプロセスを太郎君と保育者のかかわりから感じることができました。

1歳児、まだまだ感情の制御などできる年齢ではないけれど、大人が傍にいてその子の気持ちを思い、察してあげる、適切な対応をしてあげることで穏やかな気持ちでいられよう

なっていく。

0歳児の育ちから

子どもの育ちはそれぞれであり、個人差がありますが年齢ごとに発達のポイントがあります。愛着の形成でもふれましたが大人との情緒的なかかわりによって人への信頼関係をつくる時期と言えます。大人に見つめられ、優しく話しかけられ、ときには心地よい声で歌ってもらったり、抱かされ、身体をなでてもらい心地よいスキンシップが情緒を安定させていきます。心地良さと不快を感じる感情も育ち、毎日の育児行為、おむつ交換や授乳、食事などにおいても心地よいかかわりを心がけていきます。

毎年この時期になると身体的な発達の道筋を考えることがあります。長年使っている脳みそは年を追うごとに劣化が進み意識して考えてみないと風化してしまうものです。

保育に携わっているものであれば当然、概ねの発達がわかっているはずなのですが新たに入園してきた子をみながら、発達の過程を考えるわけです。

概ね3~4か月で首が座る。5~6か月で寝返りする。6~10か月ごろは盛んにハイハイをする。この時期からなんでも口に入れてしまうようになる。お座りも上手になるが頭が重たいのでバランスを崩しひっくり返る。10か月~徐々に立位できるようになってくる

つかまり立ち、伝い歩きをする。

字づらだけでもすらすらと概ねの発達があげられるがやはり保育は目の前の子をみて、感じていくもので理論上の発達は参考にはなるがそれぞれの育ちをしっかりと見て、感じていくことが望ましい。時折、歩行が遅いのでと悩まれる方もいる。立ったり、座ったりはその子のバランスに起因すると私は思う。身体より頭の方が重いという、赤ちゃんの頃の特徴、細身で頭の小さい子はバランスがとれハイハイをせず歩いてしまうことも多々ありますが「ハイハイの重要性」をお伝えしたいものです。

新生児からしばらくは一日の大半を寝て過ごします。自分の要求は泣くことで表現、3か月ごろから「あーうー」と声を出し4か月ごろあやすと笑う。5か月ごろから快、不快の感覚が育ってくる。ほんの数か月で様子が変化する。月日の経つのは早いので子どもの成長の早さに驚かされることはしばしばあります。繰り返される毎日ですが保育園での生活で同じものはありません。

遊びの姿、一つをとってもそれぞれのエピソードがあります。

人間、生身の身体ひとつですができるだけ多くの子とも関りたいと思うこの頃です時間は無駄にはできません。

（園長 廣部 信隆）

